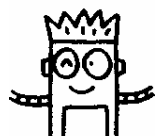


まつおばしょう 松尾芭蕉は、どんな人だったの



ひんぱんに旅に出て、その経験をもとに、俳諧に
「蕉風」を打ち立てた、元禄時代の俳人だよ。

芭蕉の本名は、松尾宗房です。1644年に伊賀上野（三重県上野市）で、松尾与左衛門の次男として生まれました。19歳のとき、藤堂藩の侍大将の子藤堂良忠に仕え、良忠とともに俳諧を習いました。俳諧とは、日本独特の詩で、五・七・五の長句と、七・七の短句を、連続してくり返すものです。最初の五・七・五を発句とよび、この発句だけを独立した文学作品としたものが、俳句です。23歳のときに良忠が病死すると、俳人になることを志しました。

江戸で俳人として名を上げた

1672年に江戸にうつってから、俳人として名を上げ、其角・嵐雪らの弟子が集まりました。俳号（俳人としての名前）は、初めは宗房、のちに桃青を使いました。1680年から、深川の魚商人の生けすの番小屋に住みました。弟子からおくられた芭蕉が、庭にあったので、その小屋は芭蕉庵、彼は芭蕉翁とよばれ、自分でも、「芭蕉」や「はせを」と署名するようになりました。

40代から旅に明け暮れた

1682年12月の大火で、芭蕉庵が焼けてから（1年後に再建）、芭蕉はひんぱんに、旅に出るようになりました。そして、旅の体験を通して、「蕉風」とよばれる作風を打ち立てていきました。旅先では、「野ざらし紀行」「おくのほそ道（奥の細道）」などの紀行や日記を書きました。このようにひんぱんに旅に出かけたことと、出身地が伊賀忍者で知られる伊賀であることから、「芭蕉は幕府の隠密だった」という説が、古くからあります。1694年に大阪で病気になり、51歳で亡くなりました。

ことばの意味 紀行 旅行中の体験・感想などを書きつづったもの。